

『幼なじみの天使のような顔をした年上騎士団長が王女のわたしをいつまでも女扱いしてくれないから、隣国の王子と情熱的な夜を過ごしたと嘘の報告をしたところ、突然豹変してあまあま鬼責めされた挙げ句、絶倫魔力オチンチンで抱き潰されて誰の所有物かわからされました』

プ
ロ
ロ
ー
グ

「いやあ……♡もう許してえ……♡♡♡」

わたしはたまらず声をあげる。自分の声とは思えないほど甘い声。こんな
声を出せることを今日初めて知った。

いや、教え込まれている最中だった。

「ダメだよ」

「あっ……♡」

耳元であっさりと拒否される。

いつもの甘やかすような優しい声音なのに、ガブリエルは許してくれない。
それだけで身体が震えて、頭がシビれてしまう。

（そっかあ……♡ダメなんだあ……♡）

自分に拒否権しないことをわからされる。これまでワガママし放題だっ

たけど、今自分は支配されている。その事実には子宮がキュンとする。

「朝まできっちり教えてあげるからね」

「あっ……♡」

ガブリエルはわたしの頭を無遠慮につかんだ。ベッドに押し付けるようにやさしく体重をかけられる。

わたしのお尻は高くあげられて、頭は低く押さえつけられていた。こんなはしたない格好させられるのは、人生で初めてだ。背中に軽い電流が走って、腰がビクビクしてしまう。

見えないはずなのに、ガブリエルがそれを見て邪悪に口唇を歪めたのがわかった。

「姫が誰の所有物なのか、ちゃんと自覚させるね♡」

「ああ……♡」

覆いかぶさるようにして耳元で甘く囁かれ、その言葉に脳内を犯される。

だって、わたしのオマンコには硬くて熱い凶暴なオチンチンがズリズリと押し付けられてる。

もう何度このオチンチンで絶頂させられたか……。たった一晩で、蜜より甘いその味を刷り込まれていた。

「ダメエ……♡」

そして実際、数瞬後には犯されるのはわかりきっている。

自分のか細い抵抗に反して、お尻がゾワゾワ♡して、わたしの意思なんか無視して勝手に腰がヘコ♡ヘコ♡してる。

（わたしの身体、たった数時間でガブリエルに作り変えられちゃってる……

♡朝までなんて、どうなっちゃうの……♡）

「挿れるね」

「あ……♡」

優しく予告してくれる。だけど、それは優しさからなんかじゃないことは

もうわかっている。

期待させて、想像させて、想像以上の快感を与えて、それを誰が与えてくれたかをより強く刻むため。

奥深くまで刻印して、忘れられなくさせるため。

「ああッ…♡う、ああああアッ…♡♡♡♡」

ガブリエルの熱いオチンチンが、ジュープ♡ジュープ♡ジュープ♡ってゆっくりとわたしのオマンコを掻き分けていく。

味わわせるように、濃厚に、埋め込む。

トチュンッ♡

「ひゃッ♡♡♡♡」

最後にご褒美のようにガブリエルが腰を打ちつけて、淫液がパチュッ♡と音を立てて弾けた。太ももを淫液がしとどに濡らす。

恥ずかしい。ガブリエルのお腹まで、わたしの淫液で汚してしまっている

のがわかる。それなのに、お尻がビクンッ♡ビクンッ♡って勝手に震えてしまう。

媚びを売るようにへこ♡へこ♡とガブリエルの鍛えられた硬い腹筋にオマシコ擦り付けて、我ながらなんてはしたないの……！

「ああっ……♡ハア……♡ハア……♡ごめんなさい……♡ごめんなさい……♡」

うわ言のようにわたしは謝罪した。結局たった一突きでイッてしまっている。あんなにゆっくりしてくれたのに。

いや、だからなのかじわりとイッてしまって、結果的にこんなイキ方もあるんだって教えられてしまう。

「オオッ……♡」

じんわりと絶頂感が拡がり、次いでお腹に凝縮して、背中が丸まろうとする。けれど、楔を打たれたかのようにそれをガブリエルのオチンチンが許さ

ない。

なんて無様な謝罪姿だろう。王家の誇りも何もあつたものじゃない。

顔をシートに擦り付けて、白目を剥きそうになってヨダレを垂らして、足は攣りそうにピクピク痙攣して、オマンコからはブシュッ♡って淫液を飛ばしてしまふ。

「良い子」

「はあ……♡」

だけどガブリエルは、こんな無様なわたしも受け容れて赦すかのように、その清らかな白く長い指先で乱れた髪を直してくれた。

身体は繋がったまま。

「もっといっぱいイッて良いからね。戻れなくなるまで堕としてあげる♡」

「ひうつ♡」

甘い声とは裏腹のSっぱい言葉を囁かれて、わたしの耳は燃えるように熱

くなった。

その直後、オチンチンをグリ♡グリ♡とわたしのポルチオに押し付けてくる。さっき一際ビリ♡ビリ♡来るこの場所は、ポルチオというのだと教えられていた。

「ひゃうっ…♡うああっ…♡やっ…♡らめえ…♡イってる…♡も
うイってるからあ…♡♡ひゃあっ…!?♡」

グリー♡グリー♡と身体の奥底を執拗にこじられる。

「どこでイってるの？」

「…ルチオ…♡」

「聞こえない」

「ポルチオ…♡♡」

「ヨシヨシ、姫は本当に素直で良い子だね」

満足気にガブリエルはわたしの頭を撫でて褒めてくれた。そして同時にグ

リイ♡グリイ♡とこじられる。

「ほおおおおおっ……♡♡らめらめらめっ……♡♡♡」

わたしはシーツに顔を擦り付けるようにイヤイヤと首を振る。

「この優秀なオマンコで、王子のオチンチンをたらし込んだんだね……」

やさしい声音の裏に隠れた怒りが滲んでる。

パチュンツ♡

「おっほお♡♡♡」

いきなり勢いをつけて腰を打ちつけられる。じっくりとこじられたわたしのオマンコはもうドロドロで、ガブリエルに肉杭を打たれると、たっぷりとした淫液が溢れ出てしまう。

「はしたない声……」

蔑まれるような声音に背筋が震えた。

だけど、ガブリエルはわたしの腕をつかむと、抱き寄せるように引き起こ

し、肩口にキスをする。

「姫は可愛いね♡」

いつもの甘やかすようなやさしい声。

「あ……♡」

（好き……♡やっぱりガブリエルは何だかんだ言っ
てわたしに甘いから、わたしのこと許してくれる……♡）

じんわりと温かな愛情が肩から拡がって……

パチュン♡パチュン♡パチュン♡パチュン♡

「うほおおおおお!?♡♡♡♡」

乱暴に熱いオチンチンをオマンコの奥に連続で打ちつけられて、ケダモノのような声をあげてしまう。

ガブリエルは笑みを浮かべて、耳元で囁く。

「こんな可愛い声、他の男に聞かせたんだもん。もっとお仕置が必要だよ」

かった。

なぜなら、本当にわたしが悪い子だから……。



わたしには好きな男がいる。

その男の名はガブリエル・アッシュベリー。

アッシュベリー公爵家の跡取りで、我が国の騎士団長まで務めている。すごい奴だ。

あ、ちなみにわたしはこの国の姫の一人だ。

だが、そんなことはどうでも良い。

重要なのはガブリエルのことだ。その名の通り、子どもの頃のガブリエルは天使のように可愛らしかった。

2歳年上だから、出会った頃には顔を見上げるくらいの身長差はあったはずなんだけど、なんかもう可愛かった。

銀の糸のような銀髪は太陽を反射して天使の輪を作っていたし、ミルク色の肌からはバラのようないい香りがした。多分8歳くらいだったと思うのだが。末恐ろしいやつだ。

顔はもちろん良い。言わずもがなだとは思いますが、すこぶる良い。

大きな瞳は希少なパールアイズで、一日中見ても飽きない宝石のようだし、鼻の形も歯並びだって完璧だ。神が手ずから丹精込めて作ったのだと万人が認めるだろう。

そんな美の集大成のようなものを、6歳のわたしは間近で見上げてポケーとしていたことを覚えている。

初対面の時だ。母様がいさつしなさいと横で言っていたが、それでも見惚れていた。

そんなわたしを見て、幼いガブリエルはニコツと天使のような微笑みを見せたのだ。

これはいけない。

これによってわたしの人生は決定づけられてしまった。

なんて罪作りの男だろうか。

それ以来、わたしは事ある毎にガブリエルに会いに行ったし、ガブリエルが社交場に出ると知ればデビュタントも済ませていないのに王女特権で乗り込んだ。

我ながら引く。

はつきり言って、良くないと思う。相手の都合もあるし。

でも、ガブリエルはいつでも優しかった。

「姫。今日も会いに来てくれてうれしいですよ」

そう言って、ニコツと微笑んでくれるのだ。

つい、泣きそうになる。

好きがどんどん大きくなってしまふ。

「……敬語やめて」

だからもっと近づきたくて、押しかけてるくせにワガママまで言うてしまふ。

「ふふ……、わかった」

天使が愉快そうに笑みを深める。心臓がピクンと跳ねた。

「今日からタメ口な、姫。約束だ！」

そう言って、ガブリエルは案外ヤンチャな手つきでわたしの頭をグリグリと撫でた。

「……うんっ！」

「ふふ、……ん？」

ガブリエルが少し驚いたように目を見張る。

「どうしたの？」

「姫の頭、手触りいいな。俺、クセになりそう」

愉快そうに微笑み、少年にしては大きい手で、今度は宝物に触れるようにやさしく撫でられた。

「……えへへ」

こそばゆくて、胸がいっぱいになったのを覚えている。

その日は眠れなかった。目がギンギンだった。

ベッドの天蓋には、わたしとガブリエルの結婚式が映し出されていた。もちろんハイになった頭が見せる幻覚だ。だが、幸せだった。

そこではわたしは未来の旦那様であるガブリエルに、お姫様抱っこされてキスされていた。眠れるわけがない。

「んふふ……」

つい独りで笑みまで零して、わたしはようやく眠りにつくのだった。



12歳の春、わたしはガブリエルを追いかけて、騎士学校に入学した。

貴族の子弟のみが通う由緒ある騎士学校とはいえ、王女が入学するなど前代未聞のことだった。

当然父様や母様、姉様たち、兄様たち、執事、侍女たち総出で止められたが、どうしても入学したいと泣いてお願いすると、父様は渋々許してくれた。

王とはいえ、末娘には甘い。

でも、ガブリエルは喜んでくれた。

「学年ちがうけど、これで会おうと思えば毎日会えるね」

ガブリエルはこの時14歳で、それはもう美しかった。

可愛いと美しいを併せ持つ無敵の生命体という感じだった。中性的な美し

さも感じさせ、天使の位階が上がっていると感じる。

子どもの頃はもう少しヤンチャだった気がするが、この頃のガブリエルは大人っぽい落ち着きをすでに身に纏っていた。一人称も「俺」から「ボク」に変わっていたし。

ところで今考えればということになってしまふのだが、ガブリエルが言ったのは社交辞令のようなものだったのかもしれない。

いくら何でも思春期の男の子が、年下の女の子に毎日会いたいだろうか？
アッシュベリー公爵家は王家とも血縁関係のある一族だけど、だからこそ、やはり王女相手には丁重な扱いを心掛けるものだろう。

ガブリエルは子どもの頃から頭の良い人だったから、なおのこと気を遣ってくれていたはずだ。

そう思うと、心がキュウと締め付けられて苦しくなる……。

でも、ガブリエルは天使の微笑みで喜んでくれたから、わたしはつい信じ

たくなる。

本当に喜んでくれたんじゃないかって、わずかな望みに賭けたくなる。

だから、わたしは本当に毎日会いに行った。

ガブリエルのいる教室に。学年の垣根を飛び越えて。

多分、迷惑だったと思う。

でも、ガブリエルはやはり天使のように、本当にうれしそうに微笑んでくれたし、世間話までしてくれた。

「クラスの方はどう？ 隣国の王子が留学に来てるって話だけど」

その頃わたしのクラスには、隣国の末っ子王子が留学に来ていた。

「ああ、なんか話しかけられたよ」

「ふーん、話しかけられたんだ……」

「うん。末っ子の王族で、似たような立場だから気安いみたい。まあ、知らない土地で一人は不安だね。さすがにお付きの人くらいは一緒に来てるだ

ろうけ……ど……？」

その時、ガブリエルのパープルアイズが、不意に妖しく光った気がした。心を驚掴みにされたようにドキリとしてしまう。

「……ところで姫、提案なんだけど」

「えっ!? な、なあに？」

もうガブリエルの瞳は光っていなかった。気のせいだったのかもしれない。「これからランチはいっしょに食べることにしようか？」

「いいのっ!? あ、でも、学年ごとに席決まってるけど……」

ランチは食堂にあるものすごく長いテーブルに、学年ごとに並んで食べることになっていた。

規則というわけではないが、慣習的にそうなっているようなので、さすがに遠慮していた。わたし一人がワガママだと思われるのは構わないが（実際そうだし）、ガブリエルまで悪く思われるのは良くない。

「アハハ、何を今さら」

「そ、そうだけど……あっ」

わたしが葛藤していると、ガブリエルに手を取られた。

そして、ズルいことにあの天使のような美しいお顔を、ちょっと悲しそうに歪めて聞いてくる。

「ボクといっしょにランチの時間を過ごすのイヤ？」

「そ、そんなわけないっ！　ずっと一緒にいたいっ！」

わたしはほとんど絶叫していた。ちなみにガブリエルのクラスメイト達は普通にまわりにいる。なぜなら、ここは教室だから。

「じゃあ、一緒にいたらいいよ」

どこか満足気にガブリエルは微笑んで、パッとわたしの手を離すと、クラスメイトたちに向かって言う。

「みんな、良いよね？」

それだけでガブリエルのクラスメイト達は快く承諾してくれたのだった。

「みんなも歓迎してくれてるよ」

ガブリエルがニコツと笑って言う。

「……うん、じゃあ、いっしょに食べる」

手に残ったガブリエルの熱を感じながら、わたしは泣き出しそうだった。

好きな人から大切にしてもらえて、うれしい。

ずっと好きが崩れないまま積もっていく。

思えば、わたしのガブリエルへの想いは、ガブリエル自身によって守られ

ていたのだ。

ガブリエルは天使の微笑みを向けて、わたしの頭を撫でる。

「これでもっと一緒にいられるね」

「うんっ！」

わたしは無邪気に返事を返す。

細めたパールアイズから漏れる、妖しい光にも気づかずに……。



15歳の夏休みのことだった。

「な、なに……？この禍々しいモノは……？」

目の前に屹立するソレは異様を放っていた。

それを軽々しく手にとって、ノーラン伯爵夫人は冷静な口調で言う。

「オチンチンです」

「お、オチンチン……？」

「ええ、正確にはそれを模したのですが。姫様の目にお触れになるとあつて、当家の工房総出で細部にこだわり作りました。大理石製です」

ノーラン伯爵夫人は、あくまでも表情を崩さずに、真顔で言う。

今日は王室で特別な講義が行われている。いわゆる淑女教育というもので、侍女はうしろに控えているものの、生徒はわたし一人だけだった。

「そ、そうなの……。重そうね……。？」

「持ってみますか？」

先っぽを向けられる。なぜかは分からないが、それが先っぽだということは本能的にわかった。

「い、いえ……。？」

「汚くないですよ？ 作ったばかりですから、誰も使っておりません」

「ほ、本当にいいから……。！」

使うって何だ？

「そうですか……。まあ、良いでしょう。さて、姫様はオチンチンのことはご存知でしたか？」

「ご、ご存知って……。！」

「ご存知ですか？」

なぜか圧がすごい。射抜くような目で重ねて問われる。

「それは、その……、存在としては、はい……、存知ますデス……」

圧に負けて、使い慣れない変な敬語が出る。恥ずかしくて、どんどん声が小さくなってしまふ。

（淑女教育ってこういうものなのっ!?!）

わたしはつい左後ろに控えている侍女のマリーを見た。

マリーと目が合う。しかし、背の高いマリーは姿勢を正してさらに背を高くすると、しれっと目を逸らして遠くの方を見た。

（み、見捨てられた……!）

ならばと、今度は右後ろに控えているメルを見る。

メルはわたしと目が合うと、ニコッ!と微笑み、力強くうなずいた。なんて心強い!

メルは快活に言う。

「私はオチンチンよりも、オチンポ派ですよ！」

（い、いきなり何を言ってるの？ この子は？）

ノーラン伯爵夫人が引き取る。

「たしかに様々な派閥があります。その中でもチンコ、オチンポ、オチンチンは三大巨頭と言っていいでしょう。しかし、品位を保つためには、やはりオチンチンが最適かと」

（な、何の話……？）

「さて、何のためにオチンチンがあるかもご存知ですか？」

わたしの戸惑いはよそに、講義はさらっと進む。

「その……子種を、女性のお腹に入れて……、赤ちゃんを作るため、です……」

そのくらいのことは15歳ともなれば知っている。女性同士の会話や文献で、

あくまでも知識としてただだが。

「そのとおりです。どこから入れるかといえ、オマンコです」

ノーラン伯爵夫人は、なぜかわたしの目をガッツリ見詰めて言ってくる。

頭がクラクラした。

「しかし、滞りなく子種を宿すためには、このようにオチンチンを大きい形にしなければなりません。そのために本講義はあると言えるでしょう」

真顔のノーラン伯爵夫人の講義は続いた。頭が沸騰しそうになりながらも、わたしは必死についていった。

かろうじて分かったことと言えば、ものすごく男性を興奮させると子種が出るらしい。

「それでは講義はこれで終わります」

「あ、ありがとうございます……」

ぷしゅと頭から湯気が出そうだった。

「それでは失礼致します」

ノーラン伯爵夫人は、そっけなく退室しようとする。

「え？ あ、あの、次の講義は……？」

「必要ありません」

「え？」

「反応を見る限り、姫様はまだまだ清くあられるようです。あ、これはせめてものお詫びです。お受け取りください」

「へ？ あ、あの……？」

大理石製のオチンチンを押し付けられる。

「姫様におかれましては、王女としての誇りをお忘れなきよう。それでは」
ノーラン伯爵夫人は一礼し、今度こそ退室した。最後まで表情を崩さず、キビキビした動きだが、大きなお尻がドレスの下で立体的に動くのが妙になまめかしかった。

「ど、どういうこと……？ お詫びって？」

ずっしり重たい大理石製のオチンチンを持て余しながら、わたしは当惑した。

「ふむ……、どうやら淑女教育を装った身辺調査だったようですね」

わたしを見捨てたマリィが訳知り顔でうなずく。

「はあ？」

「年頃の姫様を、男性ばかりの騎士学校に通わせているのですから、国王様はいろいろな心配なされたのでしょう」

「なにそれ？ ちょっとは女子もいるけど」

「ちよつとでしょう」

「そうだけ……、じゃあ、何？ つまり、わたしが純潔を保っているか知りたいがために、父様はノーラン伯爵夫人にわざわざ一芝居打ってもらったってわけ？」

「おそらくは」

「呆れた！ 何だったのかしら、この時間は？」

「まあまあ、姫様。これで身の潔白は証明されたわけですし、心置きなく騎士学校に通えるじゃないですか」

オチンポ派のメルが言いながら、紅茶をサーヴしてくれる。

「そうだけど……」

「それに講義自体は有益だったんじゃないですか？ ほとんど何も知らない姫様にとっては」

「そ、それはそうだけど……。ふんっ、なんだか含みのある言い方ね。メルは何か知ってるって言うの？」

「……」

メルは笑顔のまま黙した。いつも余計なことばかり言っては叱られているメルが！

「あ、あなたまさか、もう……？」

「姫様、紅茶のお代わりはいかがですか？」

マリーが割って入る。

「まだ飲んでない！ てゆーか、まさかマリー、あなたまで……!?」

「……」

マリーは姿勢を正して、明後日の方向を向いた。わたしの目を見ない。

「ふ、不潔……！ 不潔だわ……！」

わたしはワナワナと震えた。幼馴染同然に育ってきた二人の侍女がまさか知らない間に淑女になっていたなんて……！

「まあ、私たちも年頃ですし」

「姫様より、3つ上ですからねー」

2人は18歳だった。

「そ、そうね……。そうよね、ごめんなさい、不潔だなんて言って……」

「姫様は素直なところがお可愛いらしいですわ」

シヨックを隠せないわたしに、マリーが本当のお姉さんのようにやさしく微笑んで励ましてくれる。

「うう、マリー……！」

思わずマリーに抱きついた。わたしは座ったままで、マリーは立っていたから、ちょうどマリーのお腹のあたりだ。マリーのウエストはスツキリしているのに、十分やわらかくて抱き心地がいい。これに触れた男がいるだなんて……。

「あらあら、仕方のない姫様ですこと」

マリーはわたしの背中に手をまわし、落ち着かせるようにやさしく撫でてくれた。

その様子を邪気のない瞳でジーっと見ていたメルが言う。

「……姫様はガブリエル様とはまだシないんですか？」

「な、何を言ってるのっ!?　メルのエっち!」

「えー?　えっちなものの何が悪いんですかー?　いいじゃないですかー」

「え?　そ、その、悪いとかじゃなくて……」

顔が熱い。ついさっきまで講義で聞かされていたことをガブリエルとするだなんて……!

「わ、わたしはロマンチックなのが良いのっ!」

なんとか言い返すが、メルはあくまでもマイペースに言う。

「してみればいいのにー。好きな人に触れられるのって、すっごく気持ちが良いんですよ?　さっきの講義では言っていなかったけど、これ最重要だと思えますー」

「そ、そうなの……?」

（そんなに……?）

マリーが何かを思い浮かべながら言う。

「……たしかに、それはその通りね」

「そんなにつ!？」

「まあ、そうですね。それに、えっちなのがロマンチックじゃないとも限りませんし」

「くわしく教えてっ！」

それからいろいろと2人に教えてもらった。連続で講義を受けるだなんて、なんと勉強熱心なんだろうかと我ながら感心する。



時は流れてわたしは18歳になり、騎士学校を卒業した。

そして、念願叶ってガブリエルと同じ騎士団に入団した。

これまた王女が騎士団に入団するなど前代未聞だったけれど、めっちゃくち

や頑張って騎士学校を首席卒業したし、なによりもう周りは諦めていたのですんなり入団させてくれた。

「ガブリエル団長、今日からよろしくお願いします！がんばるでありますっ！」

「はい、よろしくね。がんばって」

柔らかな笑みを浮かべるガブリエル。

「えへへ、ガブリエルに敬語使うの何だかドキドキするであります」

「何を言ってるんだか……。別に二人きりの時は普段通りで構わないよ。明らかに使い慣れてないし」

たしかに、敬語なんてほとんど使ったことがなかった。甘やかされているものだから、父王にさえ甘えた口調で接している。それで父様もデレデレなのだからウィン・ウィンだ。

「助かるであります！」

「姫って、敬語使う相手いないもんね。自分より上の位の人、滅多にいないし。無敵なの？」

呆れたように微笑むガブリエル。でも、どこか「仕方ないなあ」という感じで許してくれてるのがわかる。

（…好きだ）

ところで、ガブリエルはたった二年で団長に抜擢されている。

これには理由があって、ちょうど一年ほど前に、王都を襲った巨大な魔獣をガブリエルたった一人で退治したことがあった。その功績を称えられてのことと、前の団長がケガで引退する時に指名したためだ。

すでに王国最強の騎士の呼び声も高い。

神話の時代に超常の者と契りを交わしたとされる、アッシュベリー家の力を色濃く受け継いでいるからだとも言われるが、にわかに信じられることはない。

だが、実際巨大な魔獣を倒した時、その力の顕現を多くの人が目撃しているし、わたしも目撃している。

ガブリエルのパープルアイズがぼんやりと薄い光を放ち、超常的な力を発揮したその姿を。

思えば、ガブリエルといっしょにいる時に、一瞬ガブリエルの瞳がぼんやり光っていることが時折あったかもしれない。

それは自身でも抑えられぬほどの魔力の発露だったのか……。

だが、今はそんなことはどうでも良いのだ！

「……？ 姫、どうかしたの？」

ジーっと凝視していたら、ガブリエルに怪訝な顔をされてしまった。

「はああああああ……！」

だが、わたしはこみ上げるものを抑えきれずに、自身の眉間に丸めた拳を押しつけて、深いため息をつく。

これがため息をつかずにいられようか？

だって、ガブリエルは少し見ない間にさらに美しくなっていたから。

もう大天使、いや熾天使の域に達している。

ほんの一週間前にも会っているというのに、会う度にその美貌を更新してくる。

どうなっているんだ？ 綿密な調査が必要ではないか？

ガブリエルは今年丁度20歳。190センチほどの長身に、よく鍛えられた鋼の肉体を持っている。でも、ゴツゴツした印象よりも、しなやかな感じを見るものに与える。きっとスタイルが良いからだろう。黄金比率を思わせる肢体だ。

大型の猫科を思わせる色気を常にプンプン放っていて、絶対に妙なフェロモンを醸し出してもいる。

王女として懊悩せざるを得ない。

（なんて危険な男なの？　こんな男を野放しにしている王国の治安は守られるのかしら？？？）

実際、騎士団の演習終わりに上半身裸になって水浴びをするガブリエルを見て、幾多の乙女が失神して倒れているとの報告もある。

由々しき事態ではないか？

真剣に悩んでブツブツ言っていると、

「フフッ……」

とガブリエルは突然笑みをこぼした。

「な、なに？」

「いや……、姫って表情コロコロ変わるよね。可愛い」

「か、可愛いって……！」

わたしは瞬時に真っ赤になった。

「うん、姫は可愛いよ」

「……！」

そんなことをダメ押しにあっさり言って、ガブリエルはキラキラとした微笑みを向けてくる。

そうなのだ。この男、ただ美しくなっただけではない。

冷厳ささえ感じさせる美貌から、いきなり天使のような笑みを向けてくるのだ。このギャップたるや……！

またその無邪気な笑みには、過剰な色気を纏っている。無自覚に。

この笑みを向けられてドキリと心を動かさない女はいないだろう。

なんて罪作りの男だろうか。やはり収監するべきではないか？ 恋心濫造

罪とかを王族特権で急いで立法して。

そして、看守はわたしが務めて……。

（い、いや、待てよ。ということは……！）

はたと閃く。

（ガブリエルって、恋人とかいないのだろうか……？）

今さらながら、本当に今さらながらそんなことを思う。

騎士学校時代はそういう噂は聞いたことがない。毎日会っていたから、そういう気配があればさすがにわかるだろうし、不思議なほど女性関係は清らかだった。

だが、今はさすがに一週間に一度会うのが限度だ。騎士団長は忙しい。どうしても監視の目が行き届かず、看守の務めを果たせない。

それでも合間を縫って、ガブリエルは騎士学校時代の名残りのランチ会を続けてくれている。これまたガブリエルの温情によって。

二学年上のガブリエルが先に卒業してしまうのが悲しくて泣いていると、気を遣ったガブリエルが週一でランチ会をやろうと誘ってくれたのだ。

『二人きりになっちゃうだろうけど……それでもいい？』

『うんっ！』

わたしは即答したものだ。むしろ望むところだったし。

ガブリエルの友人たちはみんな良い人だったけれど、それでもガブリエルさえいればいい。

現金にも泣きながら笑うわたしに、ガブリエルはホツとしたような笑みをくれた。

『……迷惑じゃない？』

ちょっと不安になって聞くと、ガブリエルはやさしく頬を撫でて涙を拭ってくれた。

『姫のことで迷惑に思ったことはないよ』

そう言って、やはり天使のように笑ってくれる。

……何だかガブリエルからもらってばかりだ。

その時よっぽど告白しようかと思ったけれど、胸がキュウと締まって声が出なかった。

それに、ある重大な疑惑もあるから、告白を踏み留まったというのもある。
この疑惑がある限り告白はしないほうが懸命だと、王家の血が知らせている。

なので、ずっと周りをウロチョロしているくせに、わたしはガブリエルに
まだ一度も想いを告げたことはない。

…何にせよ、忙しい身の上であるガブリエルに定期的に会えているのは
すごいことだ！

本当にありがたい。

そのうえ騎士団にうまいこと潜り込めたわけだし、今日からはずっと一緒に
仕事ができる。剣術も座学も騎馬術も頑張った甲斐があった。えらいぞ、
わたし。

…だが、それでも六日はプライベートで会えないのだ。会えない時間が
ある。

その間、ガブリエルには公務と称した夜会の類や、数々の出会いがあるだろう。これまでもあっただろう。

騎士団長だし、そもそも公爵令息だ。王国中の淑女が狙っているとしても不思議ではない。

公的な婚約者の噂といった確定的な話こそ聞こえてこないが、そういう話がいつ降って湧いてくるかと思うと気が気ではなかった。

もうすでに、いるかも知れない。

不安だからか、さっきから思考がグルグルしている……。

「……ガブリエルって恋人とかいるの？」
だから、もう直接聞いた。

「ん？　いないよ？」

（しゃっ！）

心のなかでガッツポーズをする。

（チャンス！ 攻め時だ……！）

この頃のわたしは、常から好機をうかがっている。だが、いきなり告白などということはしない。わたしとて、18歳の立派な淑女だ。

その辺りは心得ている。無計画にウロチョロしてただけではない。

「……ねえ、ガブリエル、今度のランチ会なんだけど」

「ん？ 楽しみだね」

「ねー！ 楽しみだよねー！ ……じゃなくて！」

「んん？」

「えーと……、ラ、ランチじゃなくてディナーにしない!? その、ほら、わたしたちだってもう大人、だし……！ 良いお店だって知ってるのっ！」

精一杯の勇気を出して誘った。我ながら鼻息が荒い。

実は、ドレスもすでに新調してある。

背中のザックリ開いたセクシーなやつだ。マリーとメル、そして色恋に関

して百戦錬磨の侍女たちの意見を集約して作った特注品である。

けれど、ガブリエルの返事は実にあっさりとしたものだった。

「え？ ダメだよ。夜なんて危ないじゃん」

「え……？ い、いや、その、美味しいカクテルも飲めるって言うし……」

「ダメダメ。姫にはお酒なんて早いよ。またどこぞの令嬢にでも自慢されて、うらやましくなっちゃったんでしょ？ ランチならどこでも付き合ってあげるからさ。ね？」

ガブリエルは、わたしの頭をポンポンと撫でると、顔を覗き込んでニコツと微笑んだ。

「今度、美味しいカクテルジュースの飲める店を探しておくよ」

（か、完全にあやされている……！）

そうなのだ。

告白を踏み留まった重大な疑惑とはこれだ。

つまり、わたしはガブリエルに女性として、まったく見られていないのではないか……？

（子ども扱いというか、多分高確率で手のかかる妹だと思われる……！）けれど、それを確かめることはさすがにできなかった。

もしも妹としか思われていないことが確定したら、この恋は完全に終了だ。ガブリエルのことだ。妹に勘違いさせた自分を責めて、距離を取ることでう。

定期的なランチ会は無くなり、もしかしたら、今の妹ポジションすら失うかもしれない。

そしたら、もう一緒にいることは出来なくなる。

そんなの耐えられない。

ずっと一緒だったのに……！

わたしはもう、ガブリエルのいない人生なんて考えられなくなっていた。



一ヶ月後、八方塞がりの気分が晴れないまま、わたしは夜会に出席していた。

「風に当たりたいから」と言って庭園の噴水に腰掛けて、独り夜空を眺めている。

（来たくなかったなあ……）

社交の場はそれほど好きでもない。ガブリエルがいらないなら、なおさらだ。

騎士団に入ることや父様はあっさり許してくれたけど、王女として出席しなければいけない行事等は、騎士団業務よりも優先させることを条件にしていた。

ガブリエルたちは王都の警備にあたっているというのに……。

（そもそもわたしは夜の任務も外されているのよね……。危険な任務からも遠ざけられているし……）

考えてみれば仕方がないことなのかもしれない。もしも王女の身に何かあれば、責めを負うのは団長であるガブリエルだし、ほかの団員にも咎が及ぶかもしれない。

（入団してたった一ヶ月だけど、本当にわたしってお荷物だわ……）

「はあ……」

ついため息をついてしまう。

「よう、久しぶりだな」

およそ夜会で淑女がかけられるとは思えないあいさつが聞こえた。

「……何よ。あんたも来てたの？ わざわざ隣国からだなんて、ヒマなのかしら」

こちらもおよそ淑女とは思えない口調で返す。そういう仲だった。

かつての騎士学校でのクラスメイトであるこの男は、隣国の末っ子王子で名をダミアン・ジラルという。

「ヒマなのは良いことだろう？　それだけ平和ということさ。ほら、乾杯しようぜ」

平和を祝してなのか、久しぶりの再会を祝してなのかはわからないが、ダミアンがワインの入った銀のゴブレットを手渡そうとしてくる。

「……」

わたしはそれを受け取り、ダミアンのゴブレットと軽く打ち鳴らした。ダミアンは立ったまま一気に飲み干した。喉が渴いていたのだろうか？

「……？　飲まないのか？」

わたしは口をつけなかった。

「なんだ？　本当に体調悪いのか？」

「ちがうわよ。ただ……、ガブリエルにまだ早いって言われてるから」

「ハッ」

呆れたように鼻で笑うと、ダミアンは幅の広い肩をすくめて、わたしの隣に座った。

黒髪が満月に照らされて、艶っぽい。

……そういえば、ガブリエルを抜かせばダミアンが一番のハンサムだと言われていたっけ。

「騎士団に入ったんだってな。よくやるよ」

「……皮肉っぽい口調は相変わらずみたいね。外交問題に発展するわよ？」

「よしてくれ。貴国とは末永く仲良くやるのが親父殿の方針だ。いや、この場合親父殿たちかな？」

「ん？」

ダミアンの視線を追って室内に目をやると、父様を含めた出席者たちがこちらを見ていた。アワアワと視線を外し、談笑していたフリをする。

（…ああ、なるほど。そういうことね。だからわざわざ話しかけに来たわけだ）

「言っとくけど、わたしはアンタに興味無いわよ」

「政略結婚ってそういうものだろう？」

「…」

王族の責務の最たるものというわけね。

いくら父様がわたしに甘くても、逃げられるものではない。

…最悪な気分だ。

「そんな顔すんなよ。いくら何でも、好きな女にそんな顔されたら傷つくぞ」

「…は？」

今、なんて…？

「お前って、本当にまわり見えてないよな。俺、結構露骨だったと思うんだけど」

そう言って、ダミアンは笑った。笑顔だけど、本当に傷ついている苦笑にも見えた。

「……ごめんなさい」

「だから、そういう顔させたいんじゃないんだよなあ……」

ダミアンは立ち上がった。

無神経な女に呆れたのか、苛立ったのか……。

「え？」

いや、違った。

ダミアンはわたしの前にひざまずき、わたしの手を取った。

そして、まっすぐにわたしの目を見上げる。

「お前が好きだ。政略結婚なんて関係ない。俺の妻になってくれ」

誠実な、嘘のない瞳だった。髪と同じ、黒い瞳をしているのだなと、この時初めて意識した。

心が少しも動かなかったと言えば嘘になる。

取られた手からは、緊張しているのだろうダミアンの震えが伝わってくる。

そのことが余計に誠実な、勇気ある告白のだと知らせていた。

……心が、熱くなる。

「ごめんなさい……」

だけど、わたしの口唇からは、自然に断りの言葉が零れていた。

「……やっぱり、ガブリエルのことが好きか？」

「ええ」

「どうしても？」

「どうしても」

「……そうか」

ダミアンは、まるで壊れ物を置くかのように、やさしくわたしの手を離した。

そして立ち上がると、ドカツとまたわたしの隣に座った。

「……」

「……なんだよ？」

「いえ、てっきりかっこよく立ち去るのかと……」

「ばーか、戻れるかつつの」

見ると、やはり室内にいる父様たちがこちらを見ていたようで、わざとらしく視線を外す。

ダミアンがゴニョゴニョと愚痴っぽく、しかしあけすけに言う。

「……別に政略結婚を押し通す気はないよ。ちゃんと告白して、ちゃんとフレタんだから、その結果を尊重したい。だから、この話は俺がどうあっても破談にするつもりだ。でもさ、しばらくここに居させろよ。……そのくらい良いだろ？」

「……ええ」



それからどういいうわけか、わたしとダミアンの話は弾んだ。

わたしの恋愛相談が主な話の種だった。

「うっわ……！ お前それ、ムリじゃね？」

「うっさいなー、だから悩んでるんじゃない」

「いやいや、まさかこんな拗らせてるとは思わなかったわ。てっきりもって進んだ仲なのかと思ってた。だって、お前ら四六時中一緒にいたじゃん？」

「四六時中一緒にいて何もなかったのよ……！」

「うーん、健全なようで不健全だな……」

ダミアンは思案して、何かを思いついたのかニカッとイタズラ少年のように笑った。

「こりゃアレだな。押し倒すしかないな」

「バカ」

そんなことできるならとくにやってる。

「じゃあ、逆に押し倒させるしかねーな。そのくらいの勢いが停滞したお前らの関係には必要だよ」

「だから、押し倒される可能性が皆無だから困ってるんじゃない」

「うーん、そうかあ？」

ダミアンは、目を細めてわたしを見る。

「案外イケると思うぜ？　だって、今のお前ってエロいもん」

「……それって褒めてるの？」

「最大級の賛辞だ。すげー背中綺麗じゃん」

ザックリ背中の開いたドレスを着ていた。例の特注品だ。どうせガブリエルに見せる機会は無いだろうから、もうどうでも良くなってる着てしまったの

だ。

「……ありがと」

ダミアンでも褒められればうれしい。

「どういたしまして。まあ、他にもいろいろと成長目覚ましいというか、なんと
いうか……」

ダミアンは何やらゴニョゴニョ言っ、わたしのことを上から下まで見た。

「はあ？」

「ああ、いや何でもない。忘れろ」

「はあ……？」

「あー、そうだなあ……。あとは嫉妬させるとか良いんじゃないか？ 俺と情熱的な一夜を過ごしたとか言ってみろよ。ほら、ガブリエルって独占欲強そうじゃん？」

「……？ 何言ってるの？ そんなわけじゃないじゃない」

ダミアンとの情熱的な一夜云々という言葉よりも、ガブリエルが独占欲強いという見解が気になった。

ガブリエルが独占欲強いなんて、感じたこともない。むしろ献身的なタイプだと思う。

「そうかあ？　少なくともお前に関しては独占欲バチバチだったと思うけどなー？」

もしそうなら、どんなにうれしいことだろう。つい笑みが零れてしまう。

「ふふ……、なんだかダミアンって良い奴だったのね」

「ま、振られた相手の幸せを望めるくらいには良い奴だよ」

そう言って、皮肉めいた笑みを浮かべる。

「それに、貴国とは末永く仲良くしたいですからね」

ダミアンは立ち上がって、優美なボウ・アンド・スクレープを見せた。

「これからもよろしく、お姫様」

「ええ」

わたしも立ち上がって、カーテシーを披露する。

「こちらこそ、王子様」

「……フツ」

「フフツ……」

わたしたちはお互いを見て少し笑った。やはり皮肉めいた笑みだったかもしれないが、どこか通じ合えた気もする。

「……じゃ、またな」

「ええ」

「あ、そうそう」

立ち去ろうとしたダミアンは、振り返って言う。

「本当に嫉妬させるなら、俺をダシに使うと良い。俺はこのあとすぐ国に帰るから。じゃないと、人死に出るぞ」

「……？ 何言ってるのよ。つか、しないし」

ハッ、とダミアンは鼻で笑った。まるで『コイツ、何もわかってねーなー』と呆れているかのようだ。失礼な奴め。

だが、ダミアンは真面目な顔になって言う。

「……国同士は平和で何も変わらないのが一番だ。だけど、個人同士で変化を望むなら、たまには踏み外して見ないとな」

「……それを言うなら、踏み出してじゃないかしら？」

踏み外してどうするのか。

今気づいたのだが、ダミアンは酔っているのかもしれない。やや顔が紅く、目がとろんとして眠そうだ。

意外にも、お酒は飲み慣れていないのかもしれない。

「そうとも言うな。ま、俺が言いたいことはだな、たまには籠の中の鳥じゃないってとこ見せないと、向こうも必死で追いかけて来ないんじゃないの？」

っていう至極当たり前のことだよ」

「……」

「いずれにせよ、ガブリエルにあのうさんくさい笑みを節操なしにさせられるのはお前だけだ」

「うさんくさいって……」

天使のような笑みをつかまえて何を言っているのか。

「おっと、これ以上は外交問題に発展しそうだ。とにかく自信を持て。鬼が出るか蛇が出るかは知らんが。健闘を祈る」

ダミアンは言いたい放題に言っていると、背を向けて片手を上げる。もう振り返らず、人気のまばらになった室内に去って行く。

わたしは両手にずっと握ったままだった銀のゴブレットを見た。紅いワインには、満月が映し出されていた。満月が真上に来ていることに気づく。

いつの間にか、かなりの時間が経っていたらしい。

「はあ……」

ついため息が出てしまう。

自信を持てと言われてもねえ……。

「……踏み外さないと関係は変わらない、か」

銀のゴブレットのなかで、紅い液体が揺れた。



いろいろあって熱っぽい頭を馬車が揺らしていた。

馬車に乗って、今の住まいに帰る途上だった。

騎士団に入団したのを機に、住み慣れた王宮から出て、別の屋敷で暮らしている。

騎士団の詰め所に近いからだ。

「あっ！ 停めて！」

御者に声をかけて、わたしは馬車を降りた。

「ガブリエルー！」

ちょうど見廻りが終わったところなのか、ガブリエルと団員たちの姿が見えたのだ。

わたしはうれしくて、つい走って行った。

「姫……！」

「えへへ……！」

一日の終わりに会えたのがうれしい。

だけど、ガブリエルは天使の微笑みをくれなかった。

なぜか苦々しい顔をしている。

（あっ……！ そうかっ！）

「ガブリエル団長、ご苦労さまですっ！」

いけない、いけない。他の団員達の前で呼び捨てにされては示しがつかないだろう。

「皆さんもご苦労さまですっ！」

王女とはいえ、騎士団では一兵卒に過ぎない。

わたしは団員たちに向かって、失礼のないよう深いお辞儀をした。

実際、王女だからといって夜の任務を免責され、あまつさえ夜会帰りというのは申し訳なく思う。

彼らも本心ではそう思っているのだろう。

「あ、ああ……、いえ……」

「その……、おつかれさまです……」

などと歴戦の騎士たちとは思えないほどしどろもどろの様子で、視線をキョロキョロとさまよわせる。

かと思えばおっかなびっくりチラチラとこちらを見て、怒りを感じている

のか顔を赤くさせている。

わたしは少なからずショックを受けた。普段は笑顔で接してくれるのに……。

「姫」

「わひゃっ!？」

ガブリエルの声に振り向くと、夜より濃い漆黒が目の前に広げられていた。

「わぷっ!？」

わたしはその漆黒に一瞬呑み込まれて、だけど、すぐに顔を出す。

それは黒いマントだった。ガブリエルが自身のマントを、ダイナミックに広げてわたしの肩に掛けてくれたのだ。

「……夜は冷えるからね」

そう言って、ガブリエルは目にも止まらぬ早業で、マントの襟紐をぎゅっと締める。薄いベルベット生地がガブリエルの体温を移していて温かい。

「あ、ありが……と……？」

目の前にあったガブリエルの顔と、目が合う。

ドキリ、とした

そこにはいつもの天使なガブリエルとは違って、妙に男っぽいガブリエルがいた。

わたしの顔を覗き込み、やはりどこか怒っているような、それでいてどこか切なげに苦悩しているような表情をして見詰めてくる。

……まるで、キスの一歩手前。

だが、スツとガブリエルは身体を起こすと、振り返って団員たちに言った。

「……さて、貴兄らに問おう。このように美しいドレス姿の淑女が、夜道に一人では危険だと思わないか？」

「え……、あ、はあ……？」

団員たちは何と答えたらいいのか、困惑しているようだ。

「騎士たるもの、そう考えて当然だ。まさか淑女の安全を気にせぬばかりか、下劣な目でチラチラと盗み見るなどということをするわけがない。……そうだな？」

……なんだろう？

背中しか見えないが、ガブリエルの背中からゴゴゴゴ！とオーラのようなものが漏れている気がする。

「と、当然ですっ！」

「そ、そのような不埒者はこの場におりませんっ！」

「信じて団長っ！」

団員たちは、なにやら必死だ。

「フッ……、当たり前だ。部下を信じるからこそ規律は守られ、騎士団は民を守るのだから……」

「団長……！」

やさしい声音に、団員たちはホッとしたようだ。団員たちの反応から、きつとガブリエルは天使の微笑みをしたのだろう。

緊張していた空気が一瞬ゆるんだ。

ガブリエルはにこやかな声音で続ける。

「そして、規律を保つためには罰が必要だ」

「だ、団長……？」

そのにこやかな声音に秘められた冷厳な響きに、団員たちは青ざめた。

「貴兄らに裁を下そう。詰め所に戻り次第、剣の手入れをするように。もちろん倉庫の剣も含めてすべて念入りにな」

「団長オオオオオ！」

崩折れた団員たちが「ひどいー！」「しやうがないじゃないっすかー！」「だって、見たいものー！」などと悲痛な叫び声を口々にあげている。

「え？え？」

「さ、屋敷まで送ろう」

ガブリエルは戸惑うわたしの肩を抱いて、颯爽とした足取りで歩き出すのだった。



なにはともあれ、せっかく夜道をガブリエルと歩けるのだ。

乗ってきた馬車は、御者に命じて先に帰ってもらった。

『ガブリエル騎士団長が一緒だから、安心して先に休んでいい』と屋敷の者たちにも伝えてもらう。

「うふふ……」

「ずいぶん上機嫌だね、姫」

「まあねっ！」

わたしはクルリと回転してガブリエルの前に出て、後ろ向きに歩いた。

「だって、ガブリエルがわたしを淑女って言ってくれたんだもんっ！ えっへっへっへ！」

ガブリエルは一瞬驚いた顔をしたが、次には天使の微笑みくれた。

「……当たり前じゃないか。姫はもう立派な淑女だよ」

うれしい！

少なくとも子ども扱いはされていない。

（ん？ でも、待てよ？ 妹相手に淑女と言うだろうか？）

それは微妙だ。言うかもしれない。

でも、八方塞がりだと思っていた状況で、ほんの少しでも前進できた気がする。

自信持っていいかも！

いや……！

（もはやこれはチャンスなのは……？）

「ね、ねえガブリエル、“美しいドレス姿の淑女”と言っていたけれど、その美しいはどこに掛かっているのかしら？　ドレス？　それとも……淑女？」

不安と期待が入り混じって、自然と上目遣いになってしまう。

「……どっちだったかな？」

「とぼけないで。教えて」

「ハア……、参ったな」

言うとガブリエルは、手を伸ばした。

「あ……」

マントの襟紐が引っ張られて、ほどける。

さっきガブリエル自身が結んだのに。

月明かりの下に、わたしはドレス姿で立っていた。

もうわたしを守るマントは剥ぎ取られ、ガブリエルの腕に掛かっている。

ガブリエルは、わたしの姿をまじまじと見ていた。その視線は熱くて、いつもの涼やかさとはかけ離れているように思えた。

見られているだけなのに、わたしの身体まで熱くなってくる。

まるで裸にされたみたいだ。今宵は満月だから、すべて見えてしまうのに……。

「まわって」

「……」

わたしはガブリエルの長い指で指示される通り、その場でゆっくりターンした。

ザックリと開いた背中が、ガブリエルの視線にさらされて燃えるように熱い。

「綺麗だ」

「……うんっ！」

超うれしい。

もう死んでもいいかも。

オーバーだけど、ガブリエルに褒められると生きて良かったと思う。

わけわかんないくらいうれしくなって、死んでもいいと生きて良かったを反復横跳びしてしまう。わたしの前世は犬なのだろうか？

心臓が、跳ねるようにドキドキしてる。

「でも、背中開き過ぎじゃない？」

「うん……」

やっぱりちょっと品が無さすぎた……？

「他の人にはあまり見せないで欲しい」

「……！　そ、それってどういう意味……？」

ガブリエルは呆れるような笑みを浮かべる。

それは手のかかる妹に向ける笑みの……？

身体も心も熱くなって、ドキドキして、振り回されてる。

「あ……」

ガブリエルは、再度わたしの肩にマントをかけて、丁寧な仕草で襟紐を結ぶ。

まるで大切な宝物を包むように。

「ひゃっ!？」

不意にガブリエルが、わたしの首筋に頬を寄せて、耳元で囁く。

「姫、覚えておいて……」

鼓膜が甘くとろけてしまいそう。

「宝石に焦がれる男は、愚かにもその輝きすら独り占めしたくなるものなんだよ？　それはボクだって例外ではない……」

この時、わたしの瞳孔は開いていたと思う。

その開いた瞳孔で捉えたのは、ガブリエルの雄の顔。

慄然とするほど美しく、同時に本能的恐れすら抱かせられる。

彼は捕食者で、わたしは食べられるものなのだ……。

月光を受けて闇夜に薄く光るパールアイズから、目が離せない。

「夜は危ないって言っただろ……？」

ガブリエルの大きな手が、わたしの顔に触れようとし、切なげな表情の美しい顔が近づいて来て……。

腰が抜けた。

「姫!？」

慌ててガブリエルが腰を支えてくれるが、身体が熱っぽく、芯をとろかされたようになって力が入らなくなってしまった。



わたしは今、屋敷の自室にいる。

ガブリエルにお姫様抱っこされて。

真夜中というのもあってあまり大事にしくなかつたから、塀を飛び越えて（ガブリエルはわたしを抱えたまま軽々と飛び越えた！）裏口からこっそりガブリエルに連れてきてもらったのだが、なんという役得だろうか。

（お姫様抱っこをガブリエルにされているなんて……！）

だからまたも死んでもいいと生きてて良かったという想いが交錯して、ガブリエルの逞しい腕のなかでポー♡としてしまう。

……それにしても緊急事態だ。

誰にも見咎められずに自室に二人きりなんて初めてのことだ。いつもなら侍女や執事の目が必ずあるが、命令通り彼らは先に休んでくれているらしい。もちろん正門から入ってくれば起きだしただろうけれど、とにかくにも、わたしたちは満月の夜に秘密の二人きりだ。

「降ろすね」

天蓋付きのベッドにそっと降ろされる。その行為にこっそりドキドキしてしまう。

下から覗き見るガブリエルの喉はスラッと美しく、だけでも喉仏が男性であることを主張している。

ゴクリ……！と思わず生唾を飲み込んでしまう。

「ん？ 喉渴いてるの？」

「えっ!? あ、ああ、うん！ そう！」

「待ってて」

ガブリエルはやさしく微笑むと、部屋に用意されている水差しに向かった。わたしはガブリエルの後ろ姿を見ながら思う。

（こ、こ、こ、この状況って、千載一遇の大チャンスなのでは……？）
さっき言われたことが頭を過ぎる。

『宝石に焦がれる男は、愚かにもその輝きすら独り占めしたくなるものなんだよ？ それはボクだって例外ではない……』

（ほ、宝石ってわたしのことよね……！？）

鼓膜を震わせる低い声を思い出し、またも腰から力が抜けてしまう。

（それにさっきのって、もしかしてだけど、キスされそうだったのでは……？）
ガブリエルの美しい顔が間近に迫ってきていたのを思い出し、わたしは身悶えした。

（夜は危ないってそういうことなのっ！？）

「姫、どうしたの？ どこか痛いのか？」

「あ、ちがうの、ストレッチ、ストレッチだからっ！」

「そっか。はい、水」

「う、うん、ありがと」

わたしはガブリエルから水を受け取り、ドキドキ高鳴る胸を落ち着かせよ

うと一口飲む。

ふー……。

「じゃ、ボクはそろそろ帰るから。おやすみ」

「えっ!? ちょっと待って! もう少し一緒にいてよ……!」

「いや、それはさすがにマズいでしょ……?」

ガブリエルはすでにいつものガブリエルで、まったく雄の顔をしていなかった。

（あ、あれー? 見間違いだったのかしら……?）

「い、いやいや、全然マズくないからっ! それはもう完璧に! 大丈夫だからっ!」

「……そう?」

ガブリエルの美しい眉がやや曇った気がしたが、わたしは何とか引き留める。

「ええ！　そ、それに、えーと……報告っ！　報告したいこともあるしっ!？」

「報告？　何だい？」

「え、えーと……！」

報告することなど無いが、つい口からでまかせを言ってしまった。

「ま、まあ、とりあえずここに座って？」

「……」

ベッドの端に座るよう要請すると、ガブリエルは渋々ながら座ってくれた。

「で、どうしたの？」

やさしいけれど、やや呆れたような声で促される。何も無いのがバレている気がする。

「えーと、その……！」

「何も無いならもう……」

ガブリエルが立ち上がろうとするので、わたしは慌てて言った。

「わ、わたし、さっきダミアンに告白されたわ……！」

その瞬間、空気が一変したのを感じた。

「……ダミアンって、あの隣国の末っ子王子の？」

「そ、そうそう！ わたしの元クラスメイトのっ！」

「……詳しく聞こう」

ガブリエルは前のめりになった。

険しい顔になり、雄っぽい顔になっている。

これだ！

ベッドの上で真剣な顔に見詰められ、わたしはまたも腰が抜けそうになりながらも、引き留めるためにはこれしか無いと思った。

（ダミアンもいって言ってたし……！ 悪いけど使わせてもらおうわっ！）

わたしは覚悟を決めた。何せ千載一遇、一世一代の大チャンスなのだ。

この恋を実らせるための……！

そしたら……！　もしかしたら……！　さっきは得られなかった、とろけるような甘いキスが得られるかもしれない……！

子どもの頃に夢見た、お姫様抱っこからのキス……！

そして、結婚……！

「姫？」

「あ、ああ、ごめんなさい……！」

鼻息を荒くしてトリップしていると、ガブリエルは怪訝な顔でこちらを見ていた。

（……その顔も良い！）

だって、今のガブリエルって焦れている。

わたしが焦らしている……！

図らずもドキドキした。

「告白されて……、そして、手を取られたわ」

「……それで？」

抑制されているけれど、ガブリエルは明らかに不機嫌になっている。

いつもの穏やかなガブリエルとはちがって、余裕がない。

その様子を見て、わたしはゾクゾクしてしまう。

「……結婚を、申し込まれたわ」

「……そうなんだね」

ガブリエルはショックを受けた様子で伏し目がちになり、銀糸のような長いまつ毛を何度もまたたかせた。

そんなガブリエルを目の当たりしてわたしは、

（なんて、可愛いのに……！）

鼻血が出そうだった。

（ダミアンにわたしを取られるんじゃないかって、不安に思ってくれてるの

……？）

嫉妬してくれてるの？

「で、返事は？」

伏し目がちなまま、ガブリエルは答えを急かす。むくれた子どものように苛立って。

（本当に、独占欲強いんだ……！）

そんなことあり得ないと思っていたのに、ガブリエルはわたしとダミアンの関係に嫉妬していた。

どうしようもなく胸がキュンキュンする。

好きな男から強い感情を向けられるのって、なんて甘やかなのだろう！

「フッフ……！」

だから、ガブリエルを不安にさせているのに、もう少しだけ味わいたいと思ってしまった。

その時、わたしは危ない火遊びを覚えた子どもだった。

火の色の美しさに心を囚われて、ドキドキして、その結果何が起こるのかをわかっていなかった。

一晩で山を焼き尽くす火もあるというのに。

「こんな真夜中に帰って来たんだもの、わかるでしょ……？」

調子に乗って、指先で自分の口唇に触れてみる。すこしは色っぽく見えるだろうか？

「……どういうこと？」

ガブリエルの瞳が激しく揺れる。

わたしはつい笑みを浮かべてしまう。

「フフ……、情熱的な一夜を過ごしたということよ……！」

「……！」

ガブリエルのパープルアイズが揺れていた。

わかっている。わたしは非道いことをしている。

でも、これはやはり千載一遇のチャンスなのだ。

わたしは妹なんかじゃない。

一人の女に過ぎない。

そのことをわかって欲しかった。

それに情熱的な一夜ってなんだ？

何の具体性もない。

こんなの『なーんちゃって。嘘だよー！』と言えばすぐに取り返しがつく。

だから、わたしはそう言おうとした。

「むぐう!？」

だが、嘘だと言おうとしたその口を、ガブリエルがキスで塞いだのだった。



「ふむう♡」

いきなりのキスに思わず声が漏れてしまう。

ちゅ♡むちゅ♡んちゅ♡ちゅ♡

その柔らかで甘い感触にとろけさせられてしまう。

（キ、キスってすごい……♡）

幸せなピリ♡ピリ♡とした軽い電流が、口唇から頭の後ろまでを抜けて、ガブリエルのこと以外何も考えられなくなる。

（好き……♡ガブリエル好き……♡♡）

これまで蓄積してきた好きが勝手にあふれてきて、自然と涙がこぼれる。

「ぷはっ……♡」

ガブリエルが顔を離すと、息をしていなかったことによりやく気がつく。

頭がボーッ♡としちゃう。

だけど、いきなり腰を強く引き寄せられて、ガブリエルのものとは思えな

い治安の悪い声が耳元で聞こえた。

「……もう抱くわ」

「へ……!?」

ビクンツと身体が本能的に震えてしまう、ザラついた低い声音だった。

（え？ガブリエル……よね……？）

目の前にいる男はガブリエル以外あり得ないのに、あまりの豹変ぶりに戸惑う。

目を見張ってガブリエルを見ると、ガブリエルのパープルアイズがうつすら発光していた。

「……！」

それはかつて王都を襲った巨大な魔獣を倒した時と同じ。

天使のはずのガブリエルが、まるで悪魔のように恐ろしい力を発揮した時の、ゾツとするほどの圧を感じさせる瞳が、わたしに向けられていた。

「……あ」

思わず身震いしてしまう。

「……ッ」

わたしの怯えた反応を目の当たりにしたガブリエルは、ショックを受けた顔を
する。

そして一瞬強く目を閉じると、瞳の発光現象は収まった。

「ガブリエル……？ あ……」

うつむくガブリエルに声をかけるが、ガブリエルの大きな手がわたしの頬
にやさしく触れる。

ガブリエルは、わたしの涙を拭いた。

そして顔を上げ、一瞬苦しい表情が見えたけど、すぐ次の瞬間には何か
覚悟を決めたような強い眼差しになって、わたしを強く見詰めた。

「んっ……♡」

そして、わたしの頭をいつものようにやさしく撫でて、おでこにキスを落とす。

その柔らかな感触には、たしかに愛情がこもっているように感じられた。

「あ……♡」

ガブリエルの大きな両手が、わたしの顔を包む。散らしてはならない大切な花のように。

「ごめん、怖かったよね……」

「ううん……、だいじょ……」

ガブリエルはニコツと天使のように微笑んだ。

「でも、やっぱり抱くね」

「……！」

やさしくも理性的な声音でガブリエルは改めて宣告する。

わたしの喉はさっき水を飲んだのに、もうカラカラで声が出ない。ただ手

の平から伝わる体温を感じていた。熱いくらいのガブリエルの体温が、ウソではないと告げている。

わたし、これから抱かれる……。

「あ……」

大きな手の片方がスライドし、わたしの小さな手に重なる。

「イヤなら、今言って」

もう片方の手でわたしの頬を撫でて、囁く。

重ねた手はいつの間にか指を絡めていて、言葉のうえでは拒否権を認めているくせに、もう逃がす気はないって告げている。

ガブリエルの真剣な瞳に見詰められ、わたしは息を荒くしてただ見詰め返すことしかできない。

本当は、ウソをついた謝罪をしなければいけない。

（ああ、なんてわたしは不誠実なのだろう……）

喉が渴いてるからカラカラなんじゃないって自覚する。

（ガブリエルが欲しくて、たまらない……！）

「んっ♡」

ガブリエルの柔らかな口唇が、わたしの口唇を包む。

今度は、いきなりじゃない。

見詰められて、わたしも見詰め返して、何も言葉はなかったけれど、お互いを求めていることがわかるキス。

ドキドキしてる。

でも、ただ刺激的なだけじゃなくて、温かい。

幸せ……♡

「ふもっ!?!♡」

やっぱり刺激的だった。

わたしの口唇があまりの心地良さに緩んだ瞬間、ガブリエルの舌が潜り込

んできたのだ。

「ふッ♡んっ♡」

ガブリエルの柔らかな舌がニユル♡ニユル♡とわたしの舌を求める。

わたしの舌は臆病にも奥に引っ込もうとしたけれど、すぐに見つけられてガブリエルの素早い舌に引き摺り出されてしまう。

にゆる♡ちゆる♡にゆりゅ♡

ガブリエルの舌は素早いのにやさしくて、捕らえたわたしの舌を甘くヨシ

♡ヨシ♡してくる。

「ふみゅ!?!♡うみゅ♡!?!♡」

初めての刺激すぎて、変な声が出ちゃう。舌を甘く押し潰されて、蹂躞されてる。ガブリエルに甘く乱暴にされてる……♡

ちゅぱ♡ぬちや♡ぬちゅ♡ぬちゅ♡

「ハア……♡ああ……♡」

淫らな熱い吐息が漏れてしまう。

「ハアッ……♡」

ガブリエルの舌が器用にわたしの舌をすくい上げて、ツツツ♡と舌の裏側を、奥から先端までジワジワ♡撫でるように舌先でくすぐる。

「んっ……!?♡」

そうして宙に浮かした舌を、ガブリエルは口唇をすばめて捕らえてヌコヌコ♡と扱く。最後に一際大きくわたしの舌をかぶっ♡と捕らえると、ちゅる♡とじっくりやわらかく吸ってくる。

ちゅぽん♡と限界まで舌を引っ張り出してリップで弾かれると、あまりの刺激にわたしの背筋にはビリビリ♡と電流が走り、頭がクラクラ♡した。

「ハッ♡ハッ♡」

荒い息が恥ずかしくて、わたしはガブリエルの胸に顔を埋める。

「……こういうキスは初めて？」

当たり前だ。わたしはコクンと小さくうなずく。

「ふーん……、情熱的な一夜なんて言ってたけど、大したことないんだね」

「それは……んむっ!?!♡」

言い訳しようと上を向くと、瞬時の技で親指を口に挿し込まれる。

「しゃぶって」

「……あ♡」

とても騎士とは思えないほど繊細で長い白指は、わたしの舌をやわ♡やわ♡と上から組み敷いて刺激してくる。わたしの舌は媚びるように蠢いて、命令通りにちゅぱ♡ちゅぱ♡しゃぶってしまう。

「姫の舌からワインの味がしたな……。飲んだの？」

「……」

ガブリエルに味わわれた事実には顔が熱くなるけれど、わたしは正直にコクンとうなずく。マズくてほんの一口だけでやめてしまったが、ワインを飲ん

だのは事実だった。

「ふーん……、言いつけ守れなかったんだ。姫は、悪い子だったんだね……」
指を口内に挿し入れられているから、自然と上目遣いでガブリエルを仰ぎ見ると、そこにはまるで娼婦を見るかのような目で見下しているガブリエルがいて、わたしはなぜかゾクリ♡と身震いしてしまう。

「しゃぶるの止めていいなんて言っていないよ？」

「ひゃ、ひゃい……♡」

わたしがすぐにしゃぶるのを再開すると、弄ぶように人差し指も挿し入れてきて、舌をクニ♡クニ♡と弄られる。

「良い子」

「……♡」

目を細めて言うガブリエルはどこか邪悪で、そんなガブリエルは見たことがなくて、ドキドキしてしまう。

真っ赤になって、だけど指をしゃぶり続けてしまうわたしを見下して、ガブリエルはわたしの胸の内を見破ったかのようにやさしく微笑む。

そして、耳元に顔を寄せてささやく。

「夜はまだ長いから、本当に情熱的な一夜がどんなものなのか、ボクが教えてあげるね？」

耳の軟骨をぺロリ♡と舐められる。

「ひゃんッ♡」

「返事は？」

「……ひゃい♡」

刺激的な言葉に鼓膜を甘く震わされて、わたしは感じたことのない疼きをおへソの下辺りからキュン♡キュン♡と感じてしまう。

ザックリ開いた背中も熱い。まさかこのドレスを着てガブリエルとベッドインすることになるとは思わなかった。

「寒くない？」

「うん……♡」

ガブリエルはなんだかんだやさしくて、わたしはホツとしてしまう。

「じゃ、始めるね……」

「あ……♡」

ガブリエルがわたしの耳殻を口唇で挟む。じっとり♡と熱く湿ったガブリエルの啞内が感じられる。そのまま味見されるみたい、に、ゆっくりと耳たぶまで口唇が降りてくる。

「はあ……♡」

思わず熱いため息が漏れてしまう。ガブリエルは、これからわたしのこと食べるね♡って明確に伝えてる。

言葉だけでなく仕草でまで伝えてくれるなんて、ガブリエルはどこまでも紳士だけど、羞恥心を煽られているようでもあり、ドキドキして顔が熱い。

「ううん……♡」

首筋に口唇を這わされて、鎖骨にキスされる。身体がピク♡って跳ねてしまふと、ガブリエルはまるでイタズラするようにチュッ♡チュッ♡と音をわざと立てて、キスを繰り返す。

そのたびにわたしの体は悦びに震えてしまう。

「……胸、辛そうだね」

「ふえっ!？」

たしかにわたしの胸は、というか正確にいうと乳首はいつの間にかトガリきっていて、ドレスの下から痛いくらいに主張していた。

ガブリエルはわたしのザックリ背中の開いたところから手を繰り入れて、あっという間に胸に手を伸ばす。

「あふ……♡」

けど、まだ触れない。ガブリエルの手はわたしのドレスのなかで浮いてい

て、今にも触りそうだけど、紳士的にタイミングを待っている。

乳首は敏感になっているから、触られていないのにすぐそこにガブリエルの指があるって意識するだけで身体がビクビク♡してしまう。

「触って欲しい？」

耳元で囁かれる。わたしの吐息はもう荒くて、期待しているのがバレバレだった。

だって、ガブリエルの指はさっきまでわたしの舌をクニ♡クニ♡弄んでた指で、つまりその指はわたしの唾液にまみれている。それってなんだかすごく背德的に感じられて、しかも絶対すごい刺激が来るって本能的にわかる。

「……うん♡」

わたしは興奮を煽られてフワフワしちやってる頭のまま、ついうなずいてしまった。

「良い子」

「んおっ!?♡♡」

ガブリエルの親指と人差し指がわたしの乳首を挟んで、軽く根元から先っぽに向かって抜く。それだけなのに、ビリリッ♡と感じたことのないレベルの甘い痺れが体を貫く。

「王家の人間が出しちやいけない声出てるよ？」

「あぁっ♡だってえ…♡ふぁっ♡」

ガブリエルはイジワルを言いながらも、わたしの様子を見ながらゆっくり♡じっくり♡乳首を抜く。わたしの唾液で滑りが良くなっているからか、実にスムーズな指の動きで、たまに指の腹でクリクリ♡転がしたり、乳首の先端を触れるか触れないかの絶妙な距離でカリカリ♡する。

そのたびにわたしは未知の快感に身体を震わせ、嬌声をあげてしまう。

「あんっ♡あっ♡はぁっ♡だめえ♡んむう!?♡」

キスで抗議の声を潰される。ガブリエルの舌がわたしの舌をニユル♡ニユ

ル♡絡め取って、同時に乳首もグニ♡グニ♡と指の腹で転がし潰す。

「くくくッ！♡♡」

あまりの刺激に身体がビクンッ♡と跳ねるけど、ガブリエルは容赦なくニユル♡ニユル♡グニ♡グニ♡続けて、絶え間ない快感を与えてくる。

「ああっ…♡」

口唇を離されて名残惜しい声がつい出ちゃう。ガブリエルの口唇とわたしの口唇に唾液の糸が一瞬できて切れる。

「だらしない顔」

ガブリエルに言われて、顔がカッーと熱くなる。恥ずかしいのにガブリエルに言われたからゾクゾク♡身体が反応して、寒くもないのに鳥肌が立つ。

「可愛いね」

ちゅ♡

「ふあっ…♡」

これまで触れられていなかった方の耳にキスされる。これで両耳ともガブリエルにキスされてしまった。

「脱がすね」

ガブリエルに耳元で囁かれて、わたしは赤くなりながらもコクンとうなずく。

ちゅ♡

「んっ♡」

耳元にキスを落とされる。まるでガブリエルの望む返事を出来て良い子だねって、褒められるみたいなきス。つい、うれしくなってしまう。

「……綺麗だ」

ドレスを腰のところまで脱がされて、わたしの胸が露わになる。ドキ♡ドキ♡が止まらないけど、ガブリエルが褒めてくれるとやっぱうれしい。

「あ……♡」

ゆっくりとベッドに押し倒されるけれど、ガブリエルの大きな手が後頭部と腰を支えてくれるから、不思議と安心してしまう。

ガブリエルの真剣で、どこか切なげな表情に見詰められる。……なんて美しい男なんだろう。

「んふう♡」

またキスされる。じっくり♡甘やかすようなキスは、もうクセになりそうだ。

ちゆる♡ぬちゅ♡ぬりゅ♡んちゅ♡にゆる♡

「はあ……♡はあ……♡」

つい息が荒くなってしまうけど、もっと欲しい。

「ずっとしてたいね♡」

心を見透かすかのように、ガブリエルがわたしの目を見詰めて言う。

「うん……♡」

わたしも恥ずかしいけど素直に応える。

でも、ガブリエルはわたしの頬にやさしく触れて囁く。

「ちゃんと目を見て言って？」

恥ずかしさから目をつい逸らしてしまったことを、ガブリエルは許さない。

「ずっと……キス、してたい……♡」

「だれと？」

「ガブリエルと……♡」

ガブリエルのパールアイズを見詰めて告白させられるのは、ものすごく恥ずかしくて、頭のなかがチカ♡チカ♡した。

ガブリエルはほんの少し満足そうに微笑む。

「はあ♡」

支えてくれてた腰骨を軽くカリッ♡と指先で擦られる。腰の奥が燃えるように熱いのに気付かされてしまう。

「足、もうモジモジしてるね」

「やア♡」

もう、なんて言われても知らない。初めてだから。

「姫ってこんなに淫らになれたんだね」

「ご、ごめん…？」

つい謝罪してしまう。なんだかマヌケな感じだ。

ガブリエルが目を細めて言う。

「フフ…、いいよ。もっとボクが淫らにするから…」

「んああッ!?!♡♡」

いきなり扱かれてなかったほうの乳首を、舌で舐め潰される。

ガブリエルの長い舌が柔らかさを保ったまま、わたしの乳首をグニョ♡

って押し潰してくる。

ヤケドしそうなくらい熱い。

「ひいああああっ!?!♡♡」

熱い舌で押し潰した乳首を今度は、ゆっくり♡じっくり♡こすり潰すようにジュ♡ジュ♡ジュ♡ジュ♡！♡♡って下から上に舐め潰してくる。

今初めて気づいたのだけど、ガブリエルの舌は長い。だから、このくらいだろうと予測する以上の長い快感がキチヤウ。

「ふおっ♡ほおっ♡」

たった一舐めでヤバイのに、ガブリエルは容赦なく、なおかつ丁寧に何度も舐めあげてくる。

身体が弓なりになってしまう。あまりに強い甘い刺激に、わたしはついガブリエルの頭に手を伸ばして、乳首を舐めあげるのを止めようとする。

「邪魔しちゃダメだよ」

「ああっ♡」

でも、聞いてくれない。わたしのワガママを聞いてくれない。

そのこと自体に甘い痺れを覚えて、わたしはガブリエルの柔らかな銀髪を力なく掴むことしかできない。

ガブリエルは何度もわたしの乳首をその熱く長い舌で舐め潰して、時には器用に舌でホジ♡ホジ♡グリ♡グリ♡して、さらにはもう一方の乳首はその繊細な指でカリ♡カリ♡カリ♡カリ♡って触れるか触れないかのところで爪弾く。

「お
お
っ
♡
ん
う
ゝ
ゝ
ゝ
！
♡
♡
」

ビリビリビリ♡って、乳首から身体中に甘い痺れが巡って、全身がピンツ♡ってなってしまう。

「フフ、まだ乳首だけだよ？」

「ら、らってえ……♡ひゃんっ♡」

今度は反対側の乳首を舐め潰される。

カリ♡カリ♡で乳首をトガるように育てられていたのに、急に熱くて柔ら

かくて長い刺激が来る。

もう一方の乳首はガブリエルの唾液でヌメ♡ヌメ♡になっているのを良いことに、ニユル♡ニユル♡って指で扱かれる。

両乳首を同時にガブリエルはイジメてくる。

「ら、らめえ…♡にゃ、にゃんか変…♡変になっちゃう…♡変にやの来るう…♡おかしくなるう…♡」

腰の奥が自分の意思とは関係なくウネ♡ウネ♡渦を巻くみたいに動いて、熱くて、奥から何か来てて、このままじゃ絶対ヤバイことだけはわかる。

だから、何とか甘く痺れてる手に力を入れて、ガブリエルの頭を離そうとするけれど、ガブリエルの片手にあっさりとわたしの両手は囚えられてしまう。

そして、わたしの両手は、わたしの頭の上で簡単に抑え込まれてしまう。「ガ、ガブリエル…♡もう、許してえ…♡」

ガブリエルに懇願することしか許されない。

いつもなら許してくれるはずだ。いつだって、ガブリエルはわたしに甘いから。

だけど、ガブリエルはわたしの目を見詰めて、

「ダメだ。このままイケ」

そう低い声で命令して、それまで舐め潰していた乳首を熱くてヌメった啞内に迎え入れると、ジュルルルルッ♡って一気に容赦なく吸いあげた。

「ひああああああっくくく!?♡♡♡」

同時にもう一方の乳首はグニッ♡ってツネリあげられたからたまらない。わたしの腰は一層高く持ち上がると、ビクンッ♡ビクンッ♡って何度も痙攣して、与えられたとてつもない快感を受け止めようと頑張るけれど、やっぱり無理でガク♡ガク♡ガク♡って細かく痙攣しちゃって、お腹の奥で熱い何かが弾ける。

「うっ♡あっ♡はおっ♡♡」

それはこの世のものとは思えない快樂で、身体中を巡って、頭がチカ♡チカ♡して、ボッー♡としちゃう。

「あっ…♡やっ…♡!?!♡♡」

まだガク♡ガク♡痙攣しているのに、ガブリエルがわたしの子宮のあたりをスリ♡スリ♡って大きな手のひらで愛しげにさするから、腰がビクンッ♡ってもう一段跳ねてしまって、ジュワアア♡って粗相までしてしまう。

「おっと」

ガブリエルが瞬時の判断でドレスをたくし上げてくれたけど、当たり前前にシヨーツはビチョビチョ♡になってしまった。

「やああああ♡見にやいでえ…♡♡」

恥ずかしいのに身体中がポカ♡ポカ♡して幸せで、まともに動けない。

「腰、ヘコヘコしてるね」

「やああ♡」

わたしの腰は勝手にへこ♡へこ♡してしまっただけ。粗相もまだ続いているのに、なんて恥ずかしいの……！

「……もしかして、イッたの初めて？」

「イッた……？」

これがイッたということなの？メルたちから話は聞いてたけど、こんなにすごいなんて……♡

「ふーん……。ああ、風邪引いちゃうから、脱がすね」

「う……♡」

ガブリエルは、わたしのビチョビチョ♡になったショーツをあつさりと脱がすと、半ベそをかいているわたしの頭をやさしく撫でる。

「大丈夫だよ。気持ち良くなれた証拠なんだから」

「そうなの……？」

「うん、何も悪いことないよ♡」

「そうなんだあ、良かったあ……♡」

ガブリエルは安心させるように、何だか久しぶりに天使の微笑みを見せてくれる。

冷たい眼差しは鳴りを潜めて、なぜか上機嫌だ。

「もっと見せて。もっと気持ちよくなろうね♡」

「うん……♡」

ポッ♡とした頭は幸せで、つい促されるままに返事してしまう。

「わひゃっ!?!♡」

いきなりガブリエルに足の指を舐められた。

「そ、そんなところ汚いから……」

「姫に汚いところなんて無いよ」

「うう……♡」

美しいガブリエルがわたしの足を手に取って、左足の薬指を舐めている。
正直その姿に、倒錯した美を感じて興奮してしまう。

カリッ♡

「ああッ♡」

形の良い犬歯で足の小指を齧られた。

「全部舐めるね、姫の身体。全部ボクのモノにするから♡」

「うあっ…♡」

足の小指を齧られながら、そんな宣言を目を見てされて、わたしは子宮が
キュン♡と疼くのを感じる。

（マーキングされちゃう…♡）

ガブリエルは小指から順に口に含んで、ヌメヌメ♡ジュポ♡シュポ♡チュ
ルンッ♡って丁寧に舐めていく。くすぐったくて、熱くて、身体の端っこか
ら侵略されてる。

「ハア……♡ハア……♡」

「足の指舐められて興奮してるの？」

カッー♡って熱くなってしまう。凶星だから。

「し、してないっ！」

「ホント？ もし姫に足の指舐められたら、ボクはすごく興奮すると思うけどな」

そんなことを言われて、ついガブリエルの足の指を舐めさせられてる自分を想像してしまう。

「……ねえ、ホントに興奮してない？」

ガブリエルは、改めてにこやかに聞いてくる。やさしくて、すべて受け容れてくれそうに感じてしまう。

「……してる、かも」

素直に答えたら、ガブリエルは笑みを見せた。

「フフ……、姫はエッチだね♡」

「うう……♡」

嵌められた気がする。

けれど、ガブリエルの舌がアキレス腱からツツツ♡と触れるか触れないかの、舌の熱さと柔らかさは絶妙に伝えてくるタッチで、ふくらはぎ、膝裏、太もも、そしてオマンコのすぐ近くまで来たので、わたしは枕に顔を押し付けてビクンッ♡ビクンッ♡って小刻みに震えて抗議もさせてもらえない。

チュウウッ♡と足の付け根のところに、一際強くガブリエルはキスをする。

「やああ♡」

「いっぱい跡つけてくね♡」

ガブリエルは、今度はもう一方の足を手に取って、またも丁寧に、愛しげにわたしを食む。

「ああ……♡もう……♡もう……♡♡」

わたしの腰はまた勝手にへこ♡へこ♡して、本能的に男に媚びを売るような動きをしてしまう。子宮がキュン♡キュン♡しっぱなしで熱くて、処女なのに欲しいって思ってしまう。

「まだダメだよ」

でも、ガブリエルはわたしの膝小僧にチュ♡って音を立ててキスして、目を見て言った。

「まだこれからだよ。言ったでしょ？ 全身ボクのモノにするって。だから、我慢して？」

「あッ♡んあッ♡」

無慈悲な言葉に、本当に全部ガブリエルの匂いにされてしまうんだ……♡
って想像させられて、全身がゾク♡ゾク♡♡て震えて、軽くイッてしまう。

「姫は本当にえっちだね。嬉ションしちゃってるよ？」

「やらあ♡」

ガブリエルの指摘通り、ぴゅ♡ぴゅ♡って犬みたいに嬉ションしてしまっている。

けれど、恥ずかしいと思うヒマさえ与えられず、ガブリエルはジュ♡ジュ♡ジュ♡って刻印でもつけるように強いキスを、反対側の足の付け根にする。

「ふう♡お♡んっ♡」

「ヨシヨシ♡」

子宮のあたりをイタズラにヨシヨシ♡されて、つい腰が浮き上がってしまふ。

「ふぁぁぁ♡」

「フフ、可愛い♡」

ガブリエルは満足気な声を漏らすと、丁寧に太ももの残りの部分に舌を這わす。

それなのに、オマンコだけは慎重に避けて、少しも触れても舐めてもくれ

ない。そんな風にされるから、オマンコが物凄く意識されて、とても熱い。

ガブリエルは下腹部のオマンコギリギリのところを舐めて、わたしのヘコ♡ヘコ♡抗議する腰を力付くでいとも容易く抑えつける。

「い、いじわるううう♡ああっ♡」

腰骨のあたりを舐められて、ビクンッ♡って身体が跳ねてしまった。

「ここ、弱いんだね」

「んああっ♡」

腰骨をねぶるように舐められる。あたかも親切のようだけど、絶対イジメて愉しんでる。ガブリエルは今、そういう邪悪な笑みを浮かべている。

ガブリエルの熱い舌で、どんどん身体が火照っていく。

「腰浮かして」

「あ……♡」

震える腰を従順に浮かした。命令に従うこと自体に興奮してしまう。腰に

絡まっていたドレスを、ガブリエルはスルリと下から脱がす。

これでわたしはアクセサリーの類を抜かせば、一糸まとわぬ姿となつてしまった。なんだか、裸なのにアクセサリーは着けていることが逆に恥ずかしい。まるで自分が捧げ物のように感じられて、足をモジ♡モジ♡擦り合わせてしまう。

月明かりが丁度室内に入っていて、わたしたちを照らしていた。

「……やっぱり綺麗だね」

ガブリエルはわたしの頬を撫でて、目を見詰めて褒めてくれる。

「ありがとお……♡」

わたしはとろんと自分の目かとろけるのを自覚した。どうしたって、ガブリエルに褒められると芯からうれしい。

「ねえ、ガブリエル……♡」

「うん？」

「ガブリエルも脱いで……♡」

とろけた頭でお願いしてしまう。だって、見たい。わたしだって、ガブリエルの裸見たい。

「いいよ」

ガブリエルはわたしのお願いを聞いてくれて、騎士団の制服を脱いでいく。薄手のシャツ一枚になった時、ついドキリ♡としてしまった。

ガブリエルがボタンを外す段になって、手を止めた。

「そんなに熱心に見られると、さすがに恥ずかしいな」

「だって、綺麗だから……♡」

ガブリエルは月光に照らされて、もはや神話に出てくるような美しさだった。

「じゃあ、脱がせて」

何がじゃあなのかわからないけど、わたしは手を引かれる。熱に浮かされ

るように上半身を起こして、膝立ちになって、ガブリエルのシャツのボタンに手を伸ばす。

ガブリエルのシャツのボタンを外すなんて初めてだし、緊張してものすごく手が震えてしまった。

「……ゆっくりでいいよ」

「うん……♡」

ガブリエルはやさしいけれど、絶対にわたしにやらせる気満々で、わたしの不器用な手つきを熱心に見詰めていた。

ボタンを外すに連れて、男の人ってこんなにムキムキになれるんだって驚いてしまう逞しい胸板、なだらかに続く割れた腹筋が露わになる。

（筋肉が作る陰影って、色気すごい……♡）

密着しているから、ガブリエルとの間の空気がムワァ♡ってあまりに性的になり過ぎて、クラクラしてしまう。

「ハア……♡ハア……♡」

息が荒くなつて、ボタンを外し終えるけれど、

「ベルトも頼める？」

「……はい♡」

さらに頼まれてベルトに手を伸ばす。カチャカチャと我ながら不器用な震える手つきでなんとか外す。

最後までちゃんとしなきゃと、とろける頭で思って、ベルトをトラウザーズから引き抜くけれど、視線の先には気になる膨らみがあって、目が離せない。

「姫、よく出来たね」

「え……、あっ、うん……♡」

ガブリエルに頭を撫でられて褒められると、わたしは多少正気を取り戻せた。

なのに、

「もう少し我慢できる？」

耳元で囁かれる。ガブリエルの声にはイジワルな笑みが含まれてる。オチンチンの膨らみを凝視していたのがバレている。

「ち、ちが……!?」

さすがに恥ずかしくて否定するけれど、

「ちがうの？」

「あぁっ……♡」

口唇が触れるくらいの距離で囁かれて、耳穴の奥までゾワ♡ゾワ♡させられる。

さらにいつの間にか裸の腰を抱かれています、腰とお尻の境目を指先でシュ♡シュ♡って擦られて、腰を前にへ♡♡へ♡♡出させられてしまう。

「これ、欲しい？」

「うああ……♡」

ガブリエルの膨らみが、わたしのお腹に押し当てられた。

シュッ♡シュッ♡って後ろで擦られる度に、ガブリエルの硬い膨らみをお腹で感じさせられる。

（……欲しい！）

そんなのさっきからずっと子宮がキュン♡キュン♡言いつ放しだから、シたこと無いのにわかる。

「……い♡」

だけど、さすがに口に出すのは恥ずかしい。

「素直な姫が好きだなあ」

それなのにガブリエルはイジワルで、またもやさしい笑みを浮かべて言わせようとする。

そんな顔されたら、何度でも罨にかかってしまう。

「……しい♡」

「ちゃんと目を見て言わないと。教えたでしょ？」

目を逸らして蚊の鳴くような声で言ったら、シュツ♡シュツ♡ってしてたのを、爪でカリッ♡カリッ♡って強めてくる。

「ほおっ……♡」

わたしは腰をまたへ♡♡へ♡♡させて、一層ガブリエルの硬いオチンチンをお腹に感じながら、

「欲しいっ……！♡」

ってはっきり目を見て言わされる。顔がとても熱い。

「良い子♡」

ガブリエルは上機嫌に囁いて、耳を甘噛みしてくる。

「くくくっ♡」

声にならない声をあげて、身体をビクンッ♡ビクンッ♡て震えさせて、ガ

ブリエルのシャツをつかんで耐えるしかない。非道い仕打ちだ。

「そのまま脱がして」

チカ♡チカ♡って頭が朦朧としながらも、言われるままにガブリエルのシヤツを脱がした。

「…♡」

月光に照らされたガブリエルの裸体は、大理石で出来た彫刻のように美しく、思わず感歎の声漏れてしまう。けれど、こんなに艶めかしい彫刻は世界に二つとないだろう。雄っぽい匂いがふんだんにして、自然と身体の奥がうずいた。

（こんなの絶対発情しちゃう……！）

「姫…♡」

「あ…♡」

ガブリエルは大きな手でわたしの頬を包み、親指の爪でわたしの口唇の表

面をコシヨコシヨ♡なぞった。

たったそれだけで身体中が痺れて、わたしはだらしなく口を開けてしまう。

「ん……♡」

わたしたちは見詰め合い、キスをした。ガブリエルの柔らかな舌がわたしの口唇をなぞり、わたしの身体は小刻みに震える。

「ふう♡んふう♡」

啞内の上側をチロチロ♡と舌で弄られて、内側から甘い痺れを与えられる。連動するように子宮がキュン♡キュン♡してしまう。

キュン♡キュン♡してるすぐ近くにガブリエルのオチンチンが感じられるから、わたしの腰はまたへこ♡へこ♡してしまう。

ガブリエルのチロチロ♡は念入りで、啞内で焦らされていることに気づく。
欲しい……♡

わたしは我慢できずに、ガブリエルの首に腕を巻き付けて、自らガブリエ

ルの舌に自分の舌を押し付ける。

すると、ガブリエルはよく出来ましたってご褒美をくれるように、ぎゅ♡
ってわたしを抱きしめて、舌を絡ませてくる。

にゆる♡じゆる♡♡♡うじゅ♡ちゆる♡

部屋中に淫らな水音が満ちて、頭のなかに響く。

「むう♡んふう♡」

情けない声が漏れてしまうくらい気持ちいい。ガブリエルの長い舌がわたしの舌を絡め取り、にゆる♡にゆる♡した触感はもうお互いが溶け合っているように錯覚させる。

幸せ…♡

全身がポカポカする…。

「あうっ♡」

いきなり両乳首を下から掬い上げるように、ガブリエルはその長い指で繊

細にスリ♡スリ♡スリ♡スリ♡ってしてくる。

さつき教えられたばかりの快感に全身の力が抜けて、甘い電流が身体の自由を奪う。

こんなの不意打ちだ。

「ら、らめえ…♡」

わたしは這々の体で口を離す。

「こ、こんなの、ズルいからあ…♡」

温かな幸せを感じていたはずの身体に、いきなりの強い刺激過ぎる。

「うあ♡はあ♡んっ♡ひうっ♡」

なのに、ガブリエルのスリ♡スリ♡は止まらない。抗議したのに、止まらない。

「…」

ただ冷徹な瞳でわたしの痴態を見下ろしている。

（躡けられてるっ……！♡）

これまで教えた快感をちゃんと覚えたかどうか、まるで品質をチェックするかのような厳しさで確かめられていることに気づく。

「……ズルい？ 騎士道にでも反する？」

「そ、そうっ♡反してるからぁ♡」

スリ♡スリ♡スリ♡スリ♡って、言葉を交わす間にも指先はどんどん加速して、わたしの乳首はまたパンパン♡に育てられてる。

ピンッ♡って張って痛いくらいなのに、そこから身体全体を蝕む甘い痺れが止まらない。

「うぁぁっっ♡♡」

このままじゃまたイツちゃう……！膝立ちの身体が弓なりに反って、ピンッ♡ってなっちゃう。

「仕方ないなぁ……」

でも、ガブリエルはやっぱりわたしに甘いから、結局のところ抗議を聞き入れてくれたのか、ギリギリのところでもスリ♡スリ♡を止めてくれる。

「ハア……♡ハア……♡んむッ!?♡♡」

荒い息を整えようと油断していると、ガブリエルはわたしの後頭部をその大きな手で掴んで引き寄せて、無理やりキスを再開する。

息ができない……♡

苦しい……♡

「くくくくッ♡♡」

ジュルルルッ♡スリ♡スリ♡スリ♡スリ♡

思い切り舌を吸われて呼吸まで管理されて、同時に余った片手で乳首をスリ♡スリ♡される。

もう片方の乳首はガブリエルのたくましい身体に押し付けられて、痛いくらいにトガッた乳首を潰される。

イクっ…：…♡♡

わたしの身体はガブリエルの腕のなかで何度もビクンッ♡ビクンッ♡って跳ねる。

その間も舌は甘くチュル♡チュル♡吸われ、乳首を親指と人差し指で挟んでシュル♡シュル♡ゆるく甘やかされる。

（ま、また、イクっ…：…♡♡）

イってるのに、また甘くイかされそうになったその刹那、後頭部を掴んでいたガブリエルの大きな手が、今度はわたしのお尻を鷲掴みにして、腰を強く引き寄せた。

ドチュンッ♡

ガブリエルのトラウザーズに包まれたままの硬いオチンチンに、わたしのキュン♡キュン♡しっぱなしの子宮が叩きつけられた。

同時に舌は強くジュッ！♡と吸われ、乳首はギュッ♡てつねられる。

「くくくくくくッ♡♡♡」

イク瞬間を狙って行われたその蛮行は、まるで悪魔の所業だった。

普段なら、こんな強い刺激はただただ痛いだけのはずだ。

なのに、少しずつ計画的に慣らされて、全部強い快感に変えられてしまった。

全部、ガブリエルの思うまま。

処女なのに、子宮でイカされてしまった……♡

「おおウ……♡アあ……♡あう……♡」

ビクビクッ♡ビクビクッ♡と奥深くから来る凄まじい快感に震えるしかないわたしを抱いたまま、ガブリエルは月光のなか微笑む。

「騎士道に反するって話だったね……」

「うあッ♡」

ガブリエルはわたしのまぶたに軽いキスを落とす。それだけなのに、わた

しはチロ♡チロ♡チロ♡ってまた粗相をしてしまう。

「フフ…♡」

わたしの粗相を見て、ガブリエルはとても満足気な笑みを浮かべる。

「そうだよ。今さら気付いたの？」

「ふえ…？♡」

「騎士道に反するのも、当然だよ」

悪魔の笑みを浮かべて、ガブリエルは非道なことを言う。

「ボクは姫を墮とすことに決めただから。ボクのモノにするって、そういうことだよ？」

「ひッ…♡」

「姫の身体、ボク無しじゃ生きられないように作り変えてあげるね♡」

その瞬間、何もされていないのにゾク♡ゾク♡ゾクッ♡って背筋に甘い痺れが走った。

ガク♡ガク♡ブル♡ブル♡って太ももが震えて、いよいよ膝立ちになっているのも難しくなって、わたしはベッドに仰向けに倒れる。

足にもう力が入らない。甘い痺れが支配して、はしたなく足を開いてしま
う。

「ハア……♡ハア……♡」

わたし、どうしちゃったの……？

なんでこんなに興奮しているの……？

ガブリエル無しじゃ生きられない身体にするなんて言われて。

ガブリエルのモノにされるって言われて。

墮とす、なんて言われて……♡

「あ……♡」

わたしの足の間に、ガブリエルの大きな身体が割り込んで、月光を遮る影がわたしを包んだ。

ガブリエルの真剣な瞳に呑み込まれて、心臓は破裂しそうだった。

2026年6月発行

著者 ヘコ♡ヘコ♡堂

この本は一次創作作品です。

実際の作品や人物、団体とは関係ありません。無断転載、ウェブサイトへのアップロードを固く禁じます。

こちらはサンプルとなります。